

ていった。第一次世界大戦の影響による社会情勢の変化は、家庭生活の改善を促し、衣生活面では洋服化の風潮をもたらした。こうした背景にあつて、大正期の裁縫教授法は新たな方向を見いださねばならなかつた。本報告では、第1報明治期に引き続き、大正期の裁縫教授法の特徴・問題点などをとらえようと試みた。

2. 大正期の裁縫教授法に関する文献を中心に教授法発展の様相を整理し、特にこの期において特異なる影響力をもつたと考えられる木下竹次氏と渡辺滋氏を中心に文献による検討を試みた。

3. ヘルバルト主義を背景とした明治期からの裁縫教授法が継続される一方、木下氏は、児童中心主義（自学主義・創作学習）・「裁縫の本質」の究明を基底とした裁縫教授法の革新を提唱し、また渡辺氏は現場の実状と実際の裁縫研究の視野から「学理と実際の一致」を求め、実証的立場で裁縫教授法の改善意見を提唱した。両氏の教材論、教授方法には新たな意見と異なった見解が見られた。こうした裁縫教授に関する新しい主張や社会の衣生活改善の問題とが相まって、大正末期から昭和初期へかけて教授法の研究はいっそう盛んとなつていった。

## G-6 わが国における被服教育発展の様相(第2報) —大正期の裁縫教授法(学習法)—

文化女大短大 樋口 哲子

1. 明治末期から台頭した自由教育思想の風潮は、従来の教師中心主義への反省となり新教育運動を展開させ